兵庫県現代詩協会　会報５２号

２０２２年１２月１日　発行：時里二郎

「ふれあい文化の祭典　詩のフェスタひょうご２０２２」報告

十月二日（日）午後一時半から四時過ぎまでラッセホールで「詩のフェスタひょうご」が開催されました。まだまだコロナが心配される中、百十八名の参加申し込みがあり、当日は九十二名の参加者で盛会のうち無事終えることができました。

兵庫県芸術文化協会から県知事の挨拶文をプログラム等に掲載するようにとの要請がありましたが兵庫県現代詩協会の会則に合わないということで実行委員会参加者全員一致でお断りすることになりました。

さて、北野和博さんの流暢な司会で始まり、時里二郎会長の挨拶のあと、大きな拍手で、松下育男氏が登場され、小学校時代からのご自分の歴史をたどりながら「詩を読むこと・書くこと」と題して講演をしていただきました。いよいよ神田さよ副会長の閉会の挨拶で終了だと思っていたら松下さんの書籍を買い求める人の長い行列ができていました。この事からも講演が深い感動をもたらしたことが実感されました。講演会の成功を喜びたいと思います。皆さんのご協力に感謝いたします。

報告　野口幸雄

■講演会報告　すべてはそれぞれ

講演は盛況であった。参加を断わられた方もあったと言う。まずｐＣを開き、〈気らくに詩を書きましょう、と言いながらメモを必死に書いてきました〉と、のっけから会場を笑いの渦に引き込みながら、さらに〈今日はどうやったら、すぐれた詩とかいい詩が書けるかの話はしない。そうでないところ、将来どうやったら詩と付き合っていけるか、の話をしたい〉で始まる。

詩はそれぞれ。詩を書く人もそれぞれ。ぼくはぼくの詩、わたしはわたしの詩を書く。違っていてあたりまえ。それぞれがそれぞれのところで幸せに詩を書いていけると思う。でも、それぞれは、別のそれぞれより才能があったり無かったり、センスがあったり無かったり、器用であったり無かったり。それぞれだからそれは仕方がない。すべてはそれぞれ。誰もがそれぞれの中の一つ。出来上がった詩は比べられてしまうが、他の人とは比べるべきではない。それぞれが詩を読んだり書いたり、それぞれにその喜びがある。それぞれの人に詩と、それぞれの付き合い方がある。あっていいのではないか。

詩は何かを明らかにすることではなく、曖昧さがいいんだと、耳に心地のよい話ばかり。私はきっと大本のところは聞き飛ばし、自分に都合のいいところを聞いている。自作「顔」と「ねむりはね」の朗読あり。講演の内容とは大違い、難解

な詩。跳んで捻って撥ねた詩であった。『初心者のための詩の書き方』に、〈詩を書くことの喜びは、書いたものが自分を超えてくれることだ。爪先立ちしても届かない場所に、手形をしっかりと残せることだ。ありふれていて、なんの取り柄もない自分が、人と違ったものをこの世に残せるという驚きだ。⑾〉とある。ああ、そうなのですね。

自分を生きる！　詩を生きる！　詩を楽しもうよ！

松下育男さま、ありがとうございました。

山口洋子

■追悼　安水稔和氏
おもいだすこと

季村敏夫

京都の古い家で一しょに暮らしていた友人（編著「かつて１０・８羽田闘争があった』に寄稿している）が認知症になった。深夜三時頃に電話を寄越すことがしばしばあったので、あらかじめ覚悟はあった。春先には、多感な青春期をともに過ごした学友の骨を箸でつまんだ。二年前、長年家族ぐるみでつきあっていた親友を亡くしていたので、旧友の病は度重なる永訣とともにのしかかり、これからお前はどうするのだと問われる酷暑の日々であった。

安水稔和さんが亡くなられた、大文字焼きの日だったと知らされた。送り火のなか他界されたのか、炎の焼尽したその日の星明りを想い起し粛然とさせられた。死の告知は、どうしてこうも続くのであろうか。外は秋雨、どうやら明日も地を濡らすらしい。

おもいだすことを三つ書きとめる。十六歳のときである。授業が苦痛で友人と逃げ出し、木洩れ陽のなか寝転がっていた。眼の前は観音山公園、草の生える崖の下に安水稔和さんの家がある、どのようなかたなのか、ときめきは昨日のことのようだ。近代詩に目覚めた頃であった。早熟の友人は吉本隆明の詩集「固有時との対話」をわたしに示し、ベトナム反戦と現代詩を並行して論じてきた。わたしは安水さんの作品は一篇も読んでなかったが、学び舎のそばの長田区池田上町にひとりの詩人が住んでいることは励ましであった。これがひとつ。

それから十五年ほど経ったある日、電信柱に、安水稔和さんと多田智満子さんの名を見つけた。高取山の麓に住む君本昌久さんが主宰する「市民の学校」（一九六六年設立）のポスターが貼られていたのである。

当時のわたしは、断念した文学なるものに再び導かれる時期に差し掛かっていた。亡父の事業に専念するには詩歌は絶たねばならないと蔵書を処分、発想の全く違う未踏の道をたどり、甘ちゃんの心身にヤスリをかけていた。夜ごと明けるまで盛り場を徘徊する暮らしは七年ほど続いたが、もうけりをつけねばとおもっていたので、眩い早朝のポスターにふらふらといざなわれた。しかし安水さんと親しく話す機会はまだ先のことであった。

三つ目は阪神・淡路大震災から数日後のこと。突如リュックにペットボトルを突っ込こみ、不通になった山陽電車のレール沿いに瓦礫の街に入った。まず絶交中の君本さんをたずね、互いの無事をよろこび握手。山を下り安水さんの家へ。ご夫妻は泣き顔で見送ってくれた。会社は全壊、社員の安否確認に忙殺されていたのに素っ頓狂な行為。何に促されたのか、今もってふしぎである。

十代のときめき、齢三十をこえたときの詩歌への情熱、そして災厄の体験、逝去を知らされたとき、おもいでが去来した。

親しく話をさせていただけるようになったのは、齢四十をこえた頃であったか。ずいぶん時間を要したが、それは人見知りというわたしの性癖にも因るが、そうとばかりはいえないだろう。近くにひそむものに会おうとすれば遠のき、遠のけば会いたくなる、コンステラチオーン、星と星との関係、そんなことをおもったりする。

伊勢田史郎、君本昌久、中村隆そして安水稔和の同人誌「蜘蛛」（一九六〇年創刊、表紙津高和一）を一冊ずつ探し全号収集、八冊の「蜘蛛」を携え、ご自宅まで出掛けた日々。人柄も含め、思想の流儀の異なる四人の結びつき、とりわけ戦時下の神戸詩人事件、敗戦後の同人誌の動向に関し聞き取りをし、その都度ノートに書きとめた。ここだけの話は書かれた歴史を背後からつき動かす、まさにドキュメントであった。

ここまで書いてきて気づいたことがある。あれはいつのことであったか、ある厄介なことで二進も三進も行かなくなったのだろう、話を聞いて欲しいと電話があった。憔悴しきった表情、心労は相当なものであること、即座にわかった。その出来事に関し、数度お会いしたか、絞り出される言葉、沈黙、再び途切れ途切れの言葉。

それから数年後、菅江真澄を求める姿勢に抽象性が増した。沈黙をあらゆる角度からとらえ直し同時に、記憶の幅と奥行きを拡張させ、時空をこえた崇高さへ向かう旅、今ではそのようにおもえてならない。

■第二十二回読書会

「松下育男の詩について」
二〇二二年八月六日
県民会館　九〇二号
チューター　佐伯圭子　参加者二十九名

「詩のフェスタひょうご」に向けて、講師の松下育夫氏の勉強会が開催された。

一月の時里二郎氏の講演会で、松下育男氏の詩を読む機会があり、現代詩文庫『松下育男詩集』を手にしたが、その時の驚きと戸惑いを胸に参加した。

チューターの佐伯圭子さんが、松下育男氏の詩は今まで読んできた様々の詩集を思い浮かべて見てもかなり異色だと言われる。現代詩においては全てにおいて自由。形式、時間空間、過去現代も自由に行き来が出来き、縛るものは何もないのだが、興味深い表現に満ちている。松下氏の詩の言葉はやさしいし、難しくないが、表現が並ではなく異質である。ものを見る感覚が複雑である。「今朝／あなたはまだ／折りたたまれていますね／／あなたであることの／ひろがりは／脇のほうから　ひとたばに」(「今朝」全行)

「休みの／朝／棚を上の方につくった／のせなければならないこまごまとした物たちが／下の方にあふれてきたからだ／／次の日から／出勤のため毎朝／棚の上からとびおりるのが／つらい」(「棚」全行)

短い二つの詩編から詩人の意識のみではなく、身体性が見えてくるのが特徴である。詩を読みながら感じたことは、次に何が書かれるのだろう、という予測のつかない興味であり、それはいい意味で読者を裏切るものだと言える。足が鶴になって、靴が履けないとか、手のひらの五本の指が裂けて、歯止めになっていると、シュールな表現の仕方が凄い。それを映像的に言葉にする。

詩集『榊さんの猫』や『肴』から、自己と外界との違和感、自他に覚える不快感が強く読み取れる。詩集『きみがわらっている』はひらがなで書かれた詩だが、少し対象と距離を置いて見ているところが特徴である。

家庭を持たれてからの詩と思えるが、対象との独特の距離の取り方がユーモアを醸し、切実感を引き出している。

「おおきな　せんしゃが」を紹介してみる。

「おおきな　せんしゃが／きみのまどのそとを／なんだいもとおっている—中略—きみはなんにも／わかっていないんだ—中略—ぼくは／あるひ／やわらかな砲弾に／こなごなになって　しまうだろう」これは今、海外で起きている戦争のようものではないだろう。略した連の間に次のようなフレーズがある。「きみがシチューを／かきまぜているあいだに」とあり、恐らく社会の戦争、会社での戦いを指している。

文庫の詩集の終章には未完詩集「初心者のための詩の書き方」がある。詩論でありながら詩になっている。とても優しく分かりやすい言葉で書かれている。

「人の詩に強く打たれたことがなければ／よい詩は書けない」「詩を書くって／その思いを現実にしたい一心だと思う」「詩を書くことの喜びは、書いたものが自分を超えてくれることだ。つま先立ちしても届かない場所に、手形をしっかり残せることだ。—略—感じたこと以上の輝きを、文字の中にひっそりと閉じ込めることができることだ。」

佐伯さんは、このようにいい文章に表現できないが、長年詩に携わるうちに感得したことと重なるところがあって、とても共感できるものだったと語られる。

収録されている講演記録の一つに「まど・みちおさんの詩」がある。松下育男という詩人が、まどみちおを敬愛していることが解り、嬉しくおもったと同時に、松下育男詩集を読みとく一助となるのではないかと話された。

十月の講演会では詩について、松下育男氏からどんなお話が聞けるのだろう。

報告　橋本千秋

■第二回交流会

～詩で開こう　こころと未来を～

兵庫県現代詩協会&関西詩人協会のコラボレーションを7月22日西宮市民会館で開催。依然コロナ禍であり規模を縮小して行われた。それぞれ詩誌・詩集を持ち寄り58名が参加。第一部は詩の朗読で始め（兵庫から高橋冨美子・森田美千代・高木敏克）、詩誌からの歴史を辿るスピーチでは兵庫から「時刻表」（たかとう匡子）・「ア・テンポ」（玉井洋子）・「現代詩神戸」（永井ますみ）の各代表がプロジェクターでスクリーンに映し出され映像をもとに解説しながらスピーチをした。休憩を挟み、第二部は音楽の時間としてハルマンハーブ（山下輝代）・ピアノ演奏（中尾彰秀）で心癒された後、詩誌グループごとの紹介で交流した。最後に記念写真を撮って別れた。

前回から3年ぶりの交流会であったが終始和やかな雰囲気で進行し有意義な会であった。

みなさまからのアンケートで、それぞれ同人誌の歴史や背景の深さがわかりよかった。詩を耳から聞く朗読も音楽の演奏もすてきでした。開演前も皆さん活気に溢れており、和やかな中で進行され、豊富な内容をリラックスした雰囲

気で楽しむことができました、と概ね好評な感想が多い中、会場を見渡して思うのは進む高齢化であり、世代を超えた出会いがあればと現代詩自体や存在意義について課題を感じた、との率直な意見もありました。

報告　山本眞弓

第12回　Ｐｏｅｍ　＆　Ａｒｔ　Ｃｏｌｌｅｃｔｉｏｎ

２０２３年１月１２日（木）10時～１７日（火）１５時　期間中は10時から17時まで
会場　神戸文学館　〒６５７－０８３８　神戸市灘区王子町３－1―２
Ｔｅｌ　＆　Ｆａｘ　０７８－８８２－２０２８
主催　神戸文学館、兵庫県現代詩協会　　後援　日本現代詩人会、半どんの会

１　ポエム＆アートコレクション　会員による詩・アート作品（絵画、書、オブジェなどの展示）
搬入・展示作業　１月10日（火）１３時集合13時半より作品展示作業開始
搬出　１月１０日（火）15時から15時半。会期中及び搬出時間前の作品の引き取りは不可
参加費　１点５００円（2点まで可）搬入時に納入してください
（過去に当会に出品された作品の再出品は出来ません）。

２　講演会：演題「詩を書くということ　第四回」講師　時里二郎
1月１４日（土）14時～15時半　（今回で時里氏によるこの演題での講演は終了します）
＊　　講演会に参加ご希望の方は神戸文学館に事前に直接申し込んでください。

３　「詩の現在展」（会員の詩集、詩誌展示）本年も会員の詩集、詩誌を展示します。
（担当：福永祥子・野口幸雄）
なお、前に郵送でお知らせいたしました案内に誤りがありました。お詫びして上記のとおり訂正いたします）

第９回　2022年度文学紀行

《第９回文学紀行　酒と文化の薫る伊丹の町ぶらり歩き》

２０２３年３月１９日(日曜日)　雨天決行
集合　　JR福知山線伊丹駅改札　１０時００分
※参考　JR神戸線尼崎駅で乗換、福知山線(宝塚線)で三田方面へ
(注)阪急の伊丹駅ではありません。

「白雪ブルワリービレッジ長寿蔵」にて昼食
参加費　2,000円（昼食代含む）・観覧料等は各自負担

※行程※
10:00ＪＲ福知山線伊丹駅集合⇒伊丹市文化財ボランティアガイドの案内で徒歩にて有岡城跡⇒荒村寺(門前からの見学)⇒本泉寺⇒墨染寺(門前からの見学)⇒みやのまえ文化の郷へ・市立伊丹ミュージアム(2022年4月博物館機能を移転、柿衞文庫、伊丹市立美術館、伊丹市立工芸センター、伊丹市立伊丹郷町館、そして伊丹市立博物館を統合した歴史・文化・芸術の総合的な発信拠点⇒旧岡田家住宅・旧石橋家住宅⇒猪名野神社⇒ことば蔵⇒12:30白雪ブルワリービレッジ長寿蔵⇒解散

■会員の詩集評

時里二郎

江口節『水差しの水』（編集工房ノア）九月刊。第十詩集。モランディの絵に触発された表題作が冒頭にある。水差しや瓶やボウルの静物をひたすら描き続けた画家の創造の営み。江口さんはそのおびただしい数の静物画に、「何も変わらないが／何かが変わるには十分な時間」を見つめ、「器のすきまに器のまぼろし」を感じ、「見えぬ物を描き込む」画家の筆先に思いをはせる。その画家の営為に詩を書くことを重ねている。水差しや壺や花瓶は、日常のふだんづかいの器物である。江口さんの詩の言葉もまた、ふだんづかいの言葉。すぐそばの日常とともにあって、だれにでもわかる言葉だ。

そんな言葉で語られる何も変わらないように見える生活のなかに、見えなかったものや、隠れていた（隠されていた）ものがあらわれる。かけがえのないものの喪失やぬきさしならぬ人生の出来事が、日常の道具や家事のいとなみや、普通電車の窓の外の風景のなかにあって、それらはふだんの暮らしの時間と変わらぬ同じ時間を呼吸している。その深い悲しみや取り返しのつかない出来事も、水差しに水をつぐ日常の、なにもかわらぬいとなみを繰り返す時間とつながっているという実感が、江口さんの詩の通奏低音にある。もちろん、言うまでもないことだが、生きる喜びや生きていることの実感は、深い喪失感や抜き差しならぬ人生の出来事が突きつける辛さや悲しみの時間と深くつながっている。

ふだんの生活のとなりに、生きることや死ぬことに関わる深い悲しみや心に消えることのない辛さや苦しみが隠れている。江口さんの詩が普段遣いの日常の言葉を遣うのはおそらくそのためである。

一語でも余分なものが入ると、詩の世界は濁る。言葉は言わないことで、読み手にそれを託すいとなみ。詩は、書き手が読み手に思いを籠めた沈黙の言葉を渡して、読み手がそれを受け取ってはじめて完結するいとなみ。言葉は日常使われる言葉、自らの日常に交わされる言葉だが、実に注意をはらって選ばれている。

もう一つ、江口さんの詩の穏やかさと静かさ。私たちは詩を読むとき、自分のなかに詩（言葉）を取り込んで味わう。つまり詩は読み手の言葉によって読まれていく。それが普通の読み方だが、江口さんの詩の場合は、それができない。私たちが彼女の詩を読み始めると、逆に私たちが詩の言葉の中に入り込んでしまう。彼女の言葉は動かない。モランディの静物のように動かない。彼の絵を自らの中にとりこんで、その意味を詮索したところで意味がないのと同じように。見る者はひたすら描かれた静物の中に入っていくしかない。動くのは読み手の心のほう。すると実に豊かな詩の言葉が私たちの前に現れる。彼女が一番たいせつにしているのは言葉の息遣い、呼吸だと思う。自分の心の余分なものが混じらないように、言葉に心を委ねている。心が見据えているものがゆるがないからそれができるのだが。おそらく江口さんの詩の穏やかさや静かさが、読み手の心情と深く共鳴しあう秘密はそこにある。

表題作のほか、「普通電車」「花屋の前で」「昼のこと　朝のこと」など、心に残る作品が多い。江口さんの詩の世界の充実ぶりを実感した。

■ 常任理事会報告

第1回常任理事会　6月18日(土)於・13時～　県民会館らん　出席者　11名＊ **入退会・名簿**　現在会員数124名　入会:飯島小百合・河原真紀　退会:小西誠・田中荘介・中嶋瑞穂　今年度名簿発行済**＊会計**　4・5月会計報告＊会報51号・発行:7月1日　★別刷り会報アーカイブは3回に分けて発行する。**＊読書会**　8月6日(土)13時～(県民会館902)松下育男の詩について　チューター:佐伯圭子＊**「ひょうご現代詩集2022」**締切:10月15日　参加費:4，000円。**＊ホームページ**　今年度活動計画・関西詩人協会との交流会・詩のフェスタ・読書会の案内をアップ**＊関西詩人協会との交流会**　7月18日13時30分～17時　西宮市民会館大会議室101号室○詩の朗読○詩誌から詩壇の歴史を辿る○音楽の時間○詩誌・詩集の紹介**＊ポエム&アートコレクション展**　2023年1月頃。場所・神戸文学館**＊役員選挙**　投票用紙開票:1月20日**＊ふれあい文化の祭典詩のフェスタひょうご**　10月2日(日)13時30分～14時30分　ラッセホール・サンフラワー　講演:講師〈松下育男氏　演題「詩を読むこと・書くこと」県〈の申請書の検討　県知事の挨拶文については県よりプログラムなどに載せることが要望されている。これ〈の対処は今後文化協会と話し合う。

第2回常任理事会　9月3日(土)13時～県民会館1203　出席11名**＊入退会・名簿**　現在会員数125名　入会希望者2名＊会計6月・7月・8月会計報告**＊会報**　52号発刊12月1日予定**＊第22回読書会報告**　8月6日(土)県民会館902号室「松下育男の詩について」チューター・佐伯圭子　参加者・29名　報告・橋本千秋　第23回読書会:11月19日(土)県民会館　亀の間　テーマ黒田喜夫　チューター　高木敏克

＊「ひょうご現代詩集」締切・10月17日(月)合見積もりの結果、澪標に決定**＊関西詩人協会との交流会報告**7月18日　西宮市民会館大会議室13・30～17・00　参加者:57名(兵庫県36名+関西28名)7名(両協会在籍)**＊ポエム&アート展・詩の現在展**　2023年1月12日～1月17日　神戸文学館　特別イベント講演:1月14日14時～　詩を書くということ・第4回「講師:時里二郎＊ホームページ　更新情報・「ひょうご現代詩集」新着情報:松下育男　講演会:第22回読書会・関西詩人協会との交流会　スマホから簡単アクセスできるQRコード完成。**＊役員選挙**　被選挙人名簿・投票用紙・会報52号に同封　投票締切・2023年1月25日　開票・1月28日　選挙管理委員:牧田榮子会員／相野優子会員　事務局山本・玉川・神田　計5名**＊詩のフェスタひょうご**　役割を詩のフェスタ実行委員会にて決定　**＊文学紀行**　3月19日　JR伊丹駅集合

報告・神田さよ

■他団体会報・詩書（2022・7月～10月）

すずかけ　6月・7月・8月・9月・10月号
（兵庫県芸術文化協会）
中日詩人会会報　No.204・205（宇佐美孝二）
岡山県詩人協会だより　No.35・36（中尾一郎）
兵庫歌人クラブ会報第207号（安藤直彦）
高知詩の会通信第26号（林敏夫）
詩界通信第99・100号（日本詩人クラブ北岡淳子）
福岡詩人会会報No.183号　（田島安江）
千葉詩人クラブ会報No.258・259（秋元炯）
関西詩人協会会報第106・107号（左子真由美）
いしかわ詩人51号　（石川詩人会米村晋）
大分県詩人協会会報No.163　（井手口良一）
福井県詩人懇話会会報108　（渡辺本爾）
長野県詩人協会会報No.150・151　（鹿野剛）
秋田県詩人協会会報第66号　（横山仁）
静岡県詩人会会報　（土屋智宏）
群馬詩人クラブ会報No.321　（井上英明）
いちご通信第33号（大分県詩人連盟河野俊一）
北海道詩人No.152（北海道詩人協会坂本孝一）
埼玉詩人会会報第100号　（川中子義勝）
福島県現代詩人会会報第129号（齋藤貢）
横浜詩誌交流会会報第78号　（菅野眞砂）
岐阜県詩人会会報第18号　（天木三枝子）
福井県ふるさと詩人クラブ会報　（山内かずき）
広島県詩集第33集2022　（広島県詩人協会）
三重県詩人集VOL・30　（三重県詩人クラブ）
徳島県年間詩集2022　（徳島県現代詩協会）
言葉の花火2021　（関西詩人協会）
詩のひろば第15号　（関西詩人協会）
アンソロジー2021山吹文庫　（山吹文庫の会）
木立ち春第142号夏143号　（木立の会）
北海道詩集No.69・2022年版（北海道詩人協会）
詩集ふくい2022第38集（福井県詩人懇話会）
2022ふくい詩祭　（福井県詩人懇話会）
日本現代詩人会報No167・168（佐川亜紀）
フラジャイル9月　（柴田望）
交野が原92　（金堀則夫）
石の森第194号　（交野が原ポエムKの会）
RIVIERE183・184　（正岡洋夫）
鳥　第82号　（元原孝司）
まほろば第53号　（たかはらおさむ）
Moderato53　（岡崎葉）
山形の詩2022（山形県詩人会）
いわての詩2022（岩手県詩人クラブ）

■会員の詩集・詩誌（2022・7月～10月）

『水差しの水』江口節詩集（9月刊・編集工房ノア）
『詩と色えんぴつ』　（詩と色鉛筆の会永井ますみ）
『河口から』Ⅷ　（季村敏夫個人誌）
鶴鴿18　（江口節）
現代詩神戸277・278　（永井ますみ）
ア・テンポVOL・62　（玉井洋子）
Messier59　（香山雅代）
プラタナスVOL・70　（神戸詩人会議玉川侑香）
ContraltoNo.46　（坂東里美）
EDGING52・52-①　（寺田操）
あむの木通信第160～164号　（福永祥子）

■会員の動静・イベント報告

彼末れい子　中国音楽国際コンクール　努力賞
（ひょうたん笛演奏　6月授与）
季村敏夫　井植文化賞　報道出版部門（10月授与）
神戸の詩人の近代史を探求して埋もれた前衛詩人たちの作品を発掘し紹介した。

■入退会・ご逝去

入会　飯島小百合・河原真紀・後藤美香・里園美苗
松村明子
退会　田中信爾・藤井清
逝去　安水稔和（8月16日没）
田村周平（10月13日没）

■新会員紹介

◇松村明子

兵庫県明石市生まれ
〒569-0084 高槻市沢良木町 18-6-409
本名　松村明子　　ペンネーム（いのうえあき）
英語教師　　第一詩集(2020.12
書肆山田）『紡錘形の虫』
メールアドレス
akiko.mtmr@gmail.com

上弦の月の下

いのうえあき

庭の陰で　尻尾が通る
ざわざわ
ざわざわ
切られた尻尾が通る

昨日　わたしを夜の深みに埋葬した

今日も　掛ける
じょうろでゆっくり
埋められたものへの麻酔薬

夜空に
わあわあ
わあわあ
黄色いうすい唇　張りついて

今夜の風呂場
墓のかたちにひんやりと
俯いてからだを洗う手のひらに
ゆっくりと　ながれおちる

月のひかり

庭で
途絶えることなく
尻尾が　はしる
尻尾が　走る

◇里園美苗

〒662―0881　西宮市上ヶ原七番町１の２の 207
メールアドレス
satozono66@ezweb.ne.jp
同人誌シルクロード所属
趣味　ピアノ

時計

歴史を刻みながら
時計は動き続ける
陽が昇り沈む時も
その針は見つめていた止まってしまった時計を
腕からそっと外して
君の事を想う
遠い地で生きる君を

どうしている
今すぐ声が聞きたい
桜色した唇から
こぼれる歌を聴きたい

列車の車窓から外を見て
仕事のタイムを決める

疲れた時間を包むように
その針は動き続けた

わがままな僕の事を
君はいつも受け止めて
僕の時計をさすりながら
そっと笑ったね

どうしている
今すぐ君を抱きたい
黒く光る長い髪を
この腕に抱えたい

どうしている
今すぐ声が聞きたい

◇飯島小百合

〒654-0075　神戸市須磨区潮見台町３丁目 8-17
1962 年生まれ。専業主婦。詩は初心者ですが、自己を振り返り詩に表現していきたいと思っております。
趣味は洋裁と料理。出版物なし

玉縁ポケット

玉縁ポケット
ポイントを押さえ切り込み
出来上がりを想定

折り返す厚み

余分な一ミリ切り落とす
裏から一回アイロンまたアイロン、そして、アイロン
最後にミシンで縫込み
丈夫なポケットは出来上がる

二十七年、洋裁を学びました
糸、針、鋏、そして、アイロン
生地を選ぶ
デザインする
製図した型紙を布地に置き裁断

洋服作りは想像以上に
手間暇かかり忍耐のいる労作業
私の中に眠っていたこだわりの強さを
程よく緩和し満喫できるひととき

あたたかな生地
お気に入りのパンツスタイル
右後ろにあるポケットに手を
車でちょっとお買い物

◇河原真紀

〒657-0812　神戸市灘区箕岡通 2-6-6-802
1970 年生まれ　子どもの頃から詩が好きでした。近頃は作家の生まれ育った場所や作品の舞台を訪ねるのが楽しみです。いつか自作の詩を朗読できるよう。どうぞよろしくお願い申し上げます。

祈り

私にふたたび
詩を書かせてくれた
いもうとから
吉報があった
ようやく
光が
差し始めたようだ

やっぱり
間違いではなかった

絶望したという
彼女に届けたくて
一心に書いたのは

私が動けば
地球が動く
ということも

◇後藤美香
ペンネーム　星ヶ崎ルミ
〒650―0001　神戸市中央区6丁目2の1
生年月日　1958年3月27日
所属同人　「汽水湖」

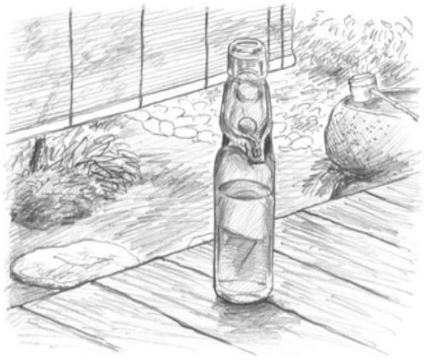
足どりも軽やかに

星ヶ崎ルミ

その日の朝はとても気分が良かった
足どりも軽やかでスキップしながら
学校に行った
着いてすぐ
「アレ、ランドセルが背中にない
家に忘れた！」

急いで遠い家まで駆けて帰った
家に着いたら母がいて　自転車で
「もう　ランドセルを学校に届けた」という

楽しくてちょっぴりさみしい
母の思い出
五十年たった今でも決して
忘れない



■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行っており読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を求めています。

入会申込　山本真弓　℡ 0798-241-3086

■ホームページプチリニュアル

ホームページをプチリニューアル、少しわかりやすくなりました。協会主催のイベントや会員からのお知らせを載せています。また、十一月から会員のエッセイの掲載も始めます。情報提供、ご寄稿をお待ちしています。スマホからQRコードでアクセス　または「兵庫県現代詩協会」で検索

http://hyogopoetstry.sakura.ne.jp/main/

（担当：北野和博　soranohitojp@yahoo.co.jp）

■会計より

順調に納入されています。未納の方は納入よろしくお願いします。年会費は4000円　振替口座　00920.9.111243　口座名　兵庫県現代詩協会　（担当　玉川侑香）

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送ってください。イベント開催時に「詩の現在展」として展示します。また詩に関するイベント情報の案内や会員の動静もお知らせ下さい。

来年度（23年度）の役員選挙を2023年1月に予定しています。更に活動の活性化を目指して推進して下さる方を自薦・他薦を問わず求めています。ご協力のほどろしくお願いします。

◎兵庫県現代詩協会事務局　山本眞弓方
住所：651-0091　神戸市中央区若菜通6-4-15-203
℡ 0798-241-3086
◎会報編集《高谷和幸》℡ 079―447―3652
◎印刷《遊文舎》〒532-0012　大阪市淀川区木川東4-17-31　℡ 06-6304-9325